

死にたがり兎と夏の午後

長串望

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

某所からの転載です。

死にたがり兎と夏の午後

目

次

1

死にたがり兎と夏の午後

ふと死にたくなる瞬間がある。

別に何か悲しいことがあつた訳でもなく、忙しさのあまり何もかも放り出してしまいたくなつた訳でもなく、過去を振り返つて自分というものがどうしようもなくやるせなくなつた訳でもなく、叱りつけられて我ながらどうしようもないやつだとくじけそうになつた訳でもなく、なく、なく、とにかくそういうつたマイナスのなにがしかがあつたという訳でもなく。

ただ、何でもないような瞬間に、不意にその衝動はやつてくるのだつた。

その日は仕事も終え書見も終え、持て余した時間をなんとなく団子でもほおばりながら私室で過ごしていた。

その何でもない時間に、あまりにも平坦に、するりとその考えは鎌首をもたげるのだつた。

(ああ、死にたい)

それはやつぱり悲しい訳でもなく、放り出してしまいたいわけでもなく、やるせない訳でもなく、くじけそうな訳でもなく、ただポンと湧き出たような死にたみだつた。

私の感情や考えやはたまた生理的状態とは何らのつながりも持たないような、空間に点を打つたような唐突さで、死にたみが私の胸の中にあつた。

あつた。
そう、それはどこかから湧いたとか降つてきたとかいうものではなく、何の脈絡もなくそこに突然現れ、そしてしばらくの間、居座るのだつた。

それでも私の胸の裡にあるということは、どうしたつて私の心が生み出したものに違はないのだけれど、しかし私にはその唐突な死にたみの所以もわからなければ、その意味も分かりはしないのだつた。
(死にたいな)

私は死にたみを抱えながら、団子をまた一口ほおばつた。

兎たちのこねてはついた団子は、甘さという点ではやや物足りない。物足りないのだけれど、何度も噛んでいるうちに自然と甘みが出てくる。その甘みはやっぱり物足りないような気もするのだけれど、しかしあぐもぐと噛んでいるうちにこれはこれでよいような気がしてくる。

もつぱら歯ごたえを楽しむもののではないだろうかというくらい、もちもちとした歯ごたえは良い。ムニムニ、もちもちとした歯ごたえが、歯に、頬に、心地よい。

そうしてやはり、なんだか曖昧に甘い。

ごくりと飲み下したころには、またもう一つつまもうかなと思うくらいなのだから、この団子の甘さというものは、計算されたものではないにせよ、うまい具合にできている。

(しかし、死にたい)

そう、しかし死にたいのだ。

団子は美味しい。されど死にたい。

いや、団子と死にたみとの間には関連性も相関性もあつたつものではないだろうけれど、しかし死にたい死にたいと思いながら団子をほおばるのはなんだか不思議に思えたし、死にたい死にたいと思いながら次の団子をつまむのは奇妙に感じられた。

それでもやつぱり私は次の団子をつまんでいたし、その曖昧な甘さを口の中でもちもちムニムニとあじわっていた。

そうして団子が腹に落ちたところで、茶をする。

茶は、兎たちが焙じたほうじ茶だ。夏はこれを熱い湯で淹れて、氷で冷まして飲むに限る。

兎たちは遊び半分に焙じて暇をつぶせるし、私はほうじ茶のさっぱりとした味わいに涼を得る。

ワイン・ワインというやつだ。

しかしこの冷やしほうじ茶というやつは、面白いものだ。

茶の葉を育て、摘み取り、蒸して、揉んで、また揉んで、干して、切つて、形を整えてやつた緑茶を、さらに焙じて、抽出して、更には氷で冷やしてやるというのだから、頭から考えると阿呆ほど手間がかかつ

ている。

そのくせ、味わいというものは極々さつぱりとしていて、渋みや苦みは全然なく、ただ香ばしさと甘さばかりが抽出される。いや、そのくせというよりは、それだけしてやつたからというべきなのだろうか。

月の様々がそぎ落としていくことで洗練されていつたことに比べて、地上では手間を積み上げていくことで価値を生み出しているところがあるようだ。それが実際的価値であるにしろ、思想的価値であるにせよ。

そうしてさつぱりとしたのど越しを楽しんで、ふうと一息つくと、思わず声にも漏れる。

「ああ、死にたい」

「その割にはご満悦だね」

返事が返るとは思わず、思わず振り向くと、私のものとは違うふわふわとした柔らかな耳が鼻先をくすぐり、思いのほかすぐそばに甘つたるい子供のような体臭が感じ取れた。

（あ、死にたい）

いまの死にたみはその子供臭い体臭に魅力を感じてしまう自分のサガに対してだが。

私がそのふわふわに目を奪われている隙に、細っこい手がするりと伸びて、私の団子を横から掠め取った。

「フムン。別に団子がまずいという訳でもなし。といつて格別うまいわけでもなし。するとそろそろお茶が怖いかな？」

「飲みたきやどうぞ」

湯飲みを押しやれば、かさついたところもない唇が吸い付き、するりと琥珀色の液体を飲み下した。

「やあれ怖い怖いと。ドクダミ茶でもなし、はてさて月の兎は何が怖いのかしら」

「別に何も怖くないわ」

強いて言うならば、平気な顔して人の団子をつまみ、茶をするこの因幡が怖かつた。

永遠亭の誰よりも幼い顔をして、それでいて恐ろしく重い時の積み重ねを経てきたこの兎が。

「怖くもないのに死にたいの？」

にたにたと底意地の悪い笑みを投げかけてくるてゐに、私は少しの間、論理的な反駁を試みようというまさしく無駄な試みを模索したが、無駄は無駄だった。

結局のところ精神衛生的に最もよろしいのは、この柔らかな頬を眺めて悪戯っぽい笑みと極力好意的に脳内変換することだつた。

「そうね。死にたいわ」

「悲しくないのに死にたいの？」

「そうね。死にたいわ」

「辛くないのに死にたいの？」

「そうね。死にたいわ」

「満たされているから死にたいの？」

「そう――のかしら」

流されるままについつい答えそうになつたけれど、しかし、それはどういうことなのだろうか。

悲しくて死にたくなるのはわかる。辛くて死にたくなるのもわかる。しかし、満たされているから死にたくなるというのはどういう理屈だろうか。

「そうなんじやないの」

「満たされてたら、普通死にたくないんじやないの」

「そうでもないんじやないの」

ぽかんとして眺めると、この小悪魔はにたにたと笑いながら私を見つめ返した。

「悲しいの？」

「悲しくないわ」

「放り出したいの？」

「放り出したいわけじゃないわ」

「やるせないの」

「やるせなくないわ」

「くじけそうなの」

「それこそ、まさか」

兎は笑つた。

「マイナスがないなら、プラスしかないよ。ゼロはないんだ」

「プラスなら生きたいじゃないの」

「マイナスで生きたい時もある」

「そうかもしだれなかつた。」

「そうでないのかもしだれなかつた。」

私が存在しないゼロの上でマイナスとプラスに困惑していると、小さな手が私の頬を撫でた。

「なんでもない瞬間に死にたくなるのはね、満たされた今まで終わりたいからさ」

兎の足は、幸運の象徴なのだという。

柔らかな感触がずっと続けばいいと思うと同時に、成程、私は不意の衝動に襲われるのだつた。
ああ、死にたい。